

第15回男女共同参画フォーラムが開催されました

第15回男女共同参画フォーラムは、「平成24年度OPGGE助成事業」の報告に加え、「理数系科目に関する意識調査」の報告会として、7月10日（水）に開催されました。

いずれも男女共同参画に関する教育の重要性を示唆する意味深いものであり、参加者は真剣なおももちで聴き入っていました。

成定洋子氏からは、本学の学生の理数系科目に関する意識調査を通して見えてきた、教員養成系大学である本学の課題の指摘と支援の具体的な方策の必要性についての提言がありました。

OPGGE助成事業について、最初に中西史氏からの報告がありました。女性教員は理科の授業が苦手という調査報告に対して、「授業に対する意識」に注目して問題の所在を明らかにされるとともに、現場での学年配当などの問題性を指摘されました。

次に、林尚示氏は、ジェンダー・ステレオタイプをキーワードにした教材の開発の重要性を、研究分担者による高校での授業実践の様子を通して報告されました。

最後に、田島宏一氏から、小学校の体育授業において性差の意識が存在すること、アルティメットを活用した授業実践による有能感の変化などから、男女共修の可能性と課題についての報告がありました。

■ 理数系科目に関する意識調査

「東京学芸大学の学生の理数系科目に関する意識調査報告」

男女共同参画支援室 成定洋子

本調査報告は、科学技術振興機構の女性研究者研究活動支援事業の一環として、本学の学生の理数系科目に関わる意識や経験、専攻選択における背景とジェンダーの影響を明らかにするために実施された、①教職入門の履修生1,160名を対象にしたアンケート調査（2012年1～2月）と、②アンケート調査の協力者のうち学科を特定した女子学生9名へのインタビュー調査（2012年11月）の報告である。

アンケート調査から、本学の学生には、専攻分野選択において、小中高時代の教員から影響を受けた学生が相対的に多く、同性の教員からの影響が大きいことが明らかになった。また、理数系の女子学生の特徴として、①女性教員から算数・数学、理科の指導を受けた割合が最も高い、②学校での理科の実験では、男性に比べて中心的な役割をしていなかったが、学校以外の科学的な活動には積極的に参加している、③理数系の男性・非理数系の男女よりも、理数系の研究や仕事をしている人に対して「専門的」「かっこいい」と答えた割合が高いことがわかった。

インタビュー調査では、男性は算数や数学が得意だが、女性は不得意であるとするジェンダー化された固定観念など、科目と性別を結びつけない教育の必要性が明らかとなった。

これらの調査結果を基に、教員養成系の大学として、ジェンダーに関わる「隠れたカリキュラム」の存在を明らかにしながら、教職志望の学生が、理数系科目に関するポジティブな経験を増やし、ネガティブな経験を活かした教育方法を模索することが望まれる。

■ O P G E 助成事業発表要旨

「小学校教員の理科の授業づくりにおける男女差に関する調査研究」

自然科学系：中西史、教員養成カリキュラム開発研究センター：三石初雄、理科教員高度支援センター：吉原伸敏
【研究協力】 人文社会学系：松川誠一

これまでに「小学校の理科授業に対する苦手意識は、女性教員の方が高い」という調査結果が複数報告されているが、授業の取り組みや教科の学力観等における性差の具体的な情報はほとんどない。その点を明らかにし、教員養成や教員研修のカリキュラムに反映するため、東京学芸大学社会学系と自然科学系の教員が共同研究として進めている「東京都小学校の授業の実態 ―社会と理科を中心に―」の一端として、教諭・主任教諭・主幹教諭の267名（女性159名、男性108名）を対象に理科の授業に取り組む意識の男女差に関して分析を行った。その結果、授業の内容や理科の学力観には有意な差はほとんど認められなかったが、理科の授業を行うことが好きな教員の割合（男性>女性）や、教科書会社の指導書の活用頻度、「準備時間の少なさ」や「スキルアップの機会の少なさ」といった理科の授業づくりに対する課題意識等（女性>男性）には有意な差が認められた。また、単元毎の不安感・困難感において有意差が認められたものは、「季節と生物」（男性>女性）、水溶液や電磁石に関する単元（女性>男性）となった。今回の調査では、男性は低学年を担当する機会が少なく、女性は各学年を均等に担当しているという結果も得られた。

小学校における理科授業力向上に向けた対策においては、ジェンダー的視点からのこれらの調査分析も加味しながら検討することが有効と考える。

「職場での働き方と性差への意識に関する教材の開発について」

総合教育科学系：林尚示（教育学講座）

【研究分担者】 吉川宗快（修士2年）、田中智絵里（修士2年）、宮崎三喜男（修士2年・東京都立国際高等学校教諭）
田辺光祐（2013年修士修了・羽村市立羽村第二中学校教諭）、呉秀麗（2013年修士修了・ヨハン早稲田外国語学校事務）

ジェンダー・ステレオタイプ（性差の固定観念）が女性の職場での働き方に影響することのないように、開発した教材を活用して高等学校で教育をすることを活動の中心とした。ジェンダー・ステレオタイプとは、「人々が共有する、男性と女性についての構造化された思い込み（信念）」である。教材で取り扱った「職場での働き方」については、管理職を女性が務めるチャンスの平等などに焦点化した。高等学校の教育では、特別活動で活用できるものを中心とした。

研究授業をととして、生徒たちの意見は、伝統的性役割容認型と伝統的性役割改善型とに分類できた。女子生徒は全員改善型、男子生徒は12名中4名が（どちらかという、という意見を含め）容認型であった。生徒たちは、ジェンダー・ステレオタイプの存在と問題点を理解できた。男子生徒の中に、女性は家庭にいてほしいという願いを貫き通した者が1名いた。その他の生徒は、女性の職場労働やジェンダー・ステレオタイプに対して人々の意識の変化が必要であるとワークシート型教材に記述していた。

職場での働き方と性差への意識に関する教材の開発について検討と実践を進めた結果、適切な教材の開発、人権教育・人権啓発の充実、特別活動・生徒指導の充実が男女共同参画社会の実現につながるということが明らかとなった。

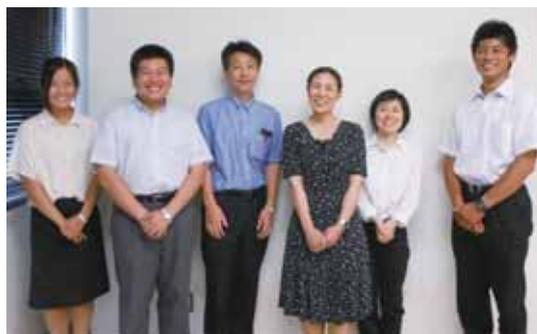
「小学校体育科における児童の意識調査と男女共修の意義」

北海道教育大学教育学部釧路校 小野恭子
附属大泉小学校 田島宏一

一般的に、小学校では男女における精神的・身体的な大きな差異が認められないため、体育学習は男女共修を基本としている。しかし、小学生においても、潜在的な性差に対する意識があるのではないか。そこで、本研究では体育学習における性差の意識を調査し、それを薄めるための教師の手立てを明らかにしていくことを目的とした。

まず、附属大泉小学校全校児童に、運動・スポーツへの意識、自己有用感、男女への意識の実態調査を行った。すると、学年を追うごとに、関心・意欲が低くなっていく傾向にあり、男女共修に対する意識も低くなっていく傾向にあることがわかった。また、5年生の男女間を比較したところ、技能、体力、思考において、女子の有能感が男子よりも有意に低いことが明らかになった。そして、性差を意識していることも明らかになった。そこで、女子の有能感を高めることで、性差の意識を薄めることができるのではないかと考え、アルティメットを題材に、児童の意識の変容をねらい、践を行った。すると、単元終了時、ほとんどの児童の有能感が高まり、女子へのイメージも向上した。しかし、男女共修の意識については、数値上での有意な変化が見られなかった。

本研究において、体育学習における男女の性差の意識が明らかになったことは1つの成果である。また、児童にとって易しく、有能感を高める教材を扱うことで、児童の意識の変容が見られ、男女共修についての意義を見出していける可能性が拓けたと言える。しかし、男女とも有能感が高まったため有意な変化が見られず、性差の意識を十分に薄められたとは言えない。したがって、今後、系統的な指導を検討し男女共修の意識についても、個々人の能力としてとらえていけるよう指導していかなければならない。





大学説明会において特別企画を開催しました

7月27日（土）大学説明会において、男女共同参画推進本部では特別企画「理系女子（リケジョ）大歓迎！身の回りの科学から明日を拓こう！」を主催しました。

昨年度は「理系女子（リケジョ）大歓迎」というポスター掲示のみでしたが、本学理系女子学生との交流ブース、2つのミニ講演：滝沢清先生「リケジョがスウガクすると…」 鴨川仁先生「ショコラを科学してみよう」共に大盛況で、今まで無かったこのような企画の必要性を強く感じました。



男女共同参画推進に向けた様々な活動

■ 第16回「∞（無限）の会」は特別企画で開催しました

7月8日のお昼休みに「∞の会」が開かれました。今回は特別企画として「科研費獲得に向けての事前準備と申請のポイント」を、科研費獲得経験者である国際センターの見世先生より、書類の書き方やそのポイントなどをご自身の経験談などを踏まえお話いただきました。参加者は村松学長、大竹副学長他、非常勤の先生を含めて10名ほどで、書類の書き方の詳細や非常勤の申請方法など、普段なかなか聞く機会がない話題について話し合われました。最後は「研究の継続性」「まずはとにかく応募すること」が大切であるということでもまとめとなり、あっという間の時間となりました。今後も特別企画など考えていきたいと思っていますので、是非お気軽に参加して下さい。皆様からのご意見もお待ちしています。

■ 平成25年度女性の大学院生のための学術論文投稿支援制度

詳細は男女共同参画推進本部のHPでお知らせいたしますので、活用ください。

■ 内閣府男女共同参画局「チャレンジキャンペーン」に参加しています

内閣府男女共同参画局は、例年「チャレンジキャンペーン～女子高校生・女子学生の理工系分野への選択～」と題して、理工系分野への進学を希望し、科学技術分野で活躍することを目指す女子高校生と女子学生を応援するキャンペーンを実施しています。平成25年度は、本学もこのキャンペーンに共催団体として参加しています。

* チャレンジキャンペーン URL：<http://www.gender.go.jp/c-challenge/>

* 東京学芸大学のメッセージ：<http://www.gender.go.jp/c-challenge/kyousai/kokuritsu/020.html>

■ 内閣府男女共同参画局 HP に「ポジティブ・アクションに関する計画」を登録しました

内閣府男女共同参画局は、男女共同参画社会の実現に向け、ポジティブ・アクションを推進し、関係機関への情報提供・働きかけ・連携を行っています。本学は、ポジティブ・アクションを推進する大学として、男女共同参画局のホームページに「ポジティブ・アクションに関する計画」を登録しました。

* 東京学芸大学の計画：http://www.gender.go.jp/policy/positive_act/datauniversity/u03.html

■ 男女共同参画支援室スタッフの紹介



カウンセラー

永田 有希子

相談サービス・メンター制度を担当しています。お気軽にご相談下さい。



事務補佐員

桑原 美希

男女共同参画支援室は本部棟1階にあります。皆様どうぞお気軽に支援室をお尋ね下さい。



コーディネーター

後藤 せいこ

ライフイベントと研究活動両立のための諸支援制度を担当しています。ご活用ください。



主任研究員

成定 洋子

ジェンダー研究・教育を担当しています。支援室HP上の各種調査報告をご覧ください。

子供たちの成長 財務施設部経理課 小山 ひろし

平成25年4月に三男が小学校へ入学しました。今回、原稿を寄せるにあたり、一人で子育てをして感じたことを男女共同参画という視点でコメントを書かせていただきたいと思っています。

まず、簡単に家族状況を紹介したいと思います。長男が中学2年生、二男が小学4年生、三男が小学1年生の4人家族です。妻は、三男が5ヵ月の時に亡くなり、以来6年間、子育てをしてきました。

私は、子供が三人もいても、仕事ばかりで家事、育児を妻に任せきりの仕事人間でした。妻の頑張りのおかげで、仕事に集中できていました。

育児というと生まれ育った環境のせいか、女性がするものかと思っていました。自分の両親がそうだったため、特に不思議と思わず、大人になりました。妻がいなくなったあとは、私の母親も病気であてにならない状況だったため、今まで週末に少し、手伝っていた程度の私が全部やらなければならない状況になり、正直、厳しい毎日でした。仕事は激務でしたが仕事をしていての方が育児より楽に感じるくらいでした。

最初は、恐る恐る乳児と接していましたが、手をかければかけるほど顔を見るだけでニコニコと反応があり、嬉しく思いました。私に元気がないと子供は凄く心配そうに顔を覗い

ていました。仕事と家事・育児の両立は大変で、仕事を終えて、一度帰宅して家事全般を終わらせてから、また夜中に職場に戻り、仕事する日々が続きました。

社会に目を向けると男女共同参画と騒がれていますが、まだまだ男女共同参画という実感が湧きません。それは、子育てにおいて言えば、私のような父子家庭は世の中から見るとまだ稀の様で、母子家庭には様々な支援があるにも関わらず、父子家庭には何も支援がない状態なのです。

つまり、支援一つとっても、男女問わず安心して仕事と家事・育児を両立できる社会にしなければ、これからの時代、少子化の減少は止まらないように思います。

さて、東京学芸大学に目を向けると、男女共同参画事業を推進しているため、子育てしながらも仕事がしやすい環境が整っているように感じます。でもまだ仕事と家事・育児を安心して行うには、業務の体制も含め見直さなければならないことがあると思います。それは、業務量に対し、人員が足りず、ゆとりがありません。急に休暇を取る必要があっても業務のことが気になり休みづらく感じる職員は多いと思います。

最後に子育ては、子供たちの成長とともに私個人も成長したと感じるくらい楽しいので、大変だと思いますが男性職員もどんどん参加して下さい。

【お問い合わせ先】

人事課職員係 清水
内線：7123
E-mail：syokuin@u-gakugei.ac.jp
FAX：042-329-7127

東京学芸大学男女共同参画推進本部
〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1
TEL：042-329-7108 FAX：042-329-7114 E-mail：danjo@u-gakugei.ac.jp
URL：http://www.u-gakugei.ac.jp/~danjo/ 詳しい情報等はホームページをご覧ください。

男女共同参画支援室
TEL/FAX：042-329-7894 E-mail：shien1@u-gakugei.ac.jp
URL：http://www.u-gakugei.ac.jp/~danjo/support/

